

「底が突き抜けた」時代の歩き方⁴⁷¹

1968年 は、どのような時代であったのか

1968年 がどのような時代であったのか、を掴むために、まず 1968年 にはどのような出来事が連なっていたのか、を知ることが先決だと思って、1961年から1974年までの年表を作成してきた。たとえば、映画『69 sixty nine』や『ドリーマーズ』、そして『パッチギ!』を取り上げて論じるためには、その時代の雰囲気を知らなければ、その時代の雰囲気が伝わる中でしか、いくら言及し論じても、言葉が空転するのは免れえないと思われる。つまり、1968年 について語る言葉は、分け入りたい内容について論じるだけでなく、1968年 という時代の発熱した雰囲気を伝える役割をも帯びていなければならないのだ。

だが、そんなことは至極当たり前のことなのである。戦前の日本人はどうして、破滅的な戦争にたやすく組み込まれてしまったのか、という疑問を解くためには、戦時中の日本を知らなくてはならないし、人々が当時の雰囲気をどのように呼吸していたのかが、いくかでも想像できるようにならなければ、戦前の日本人は時の権力者に騙されやすく、愚かな人々という皮相的で紋切り型の判断しか導くことができない。外からみれば、また後の時代から振り返れば、どんなに愚かな事態にみえようとも、内に漂っている雰囲気のなかで紡ぎだされる行動は少なくとも当事者たちにとって愚行と把握されているわけではない。だからこそ、結果としては破滅的かもしれないその先に行き着いてしまうのである。もちろん、破滅的な結末は破滅的なプロセスを辿って顕在化するから、破滅的な結末はすでにそこへ導くプロセスを選択不可能な雰囲気として準備していることのなかに胚胎している。それ故に、戦前の日本人はどのような戦時中の雰囲気をつくりだし、その雰囲気のなかに呑み込まれていったのかが追求されなくてはならないのだ。

1968年 という時代の雰囲気、を殊更に強調しなくてはならないのは、1968年 について語ろうとする37年後のいまが、あまりにも体温の低い時代であり、時代の体温の低さしか知らず、呼吸したことのない世代である、団塊世代以降の人々が増えてきているからである。そんな世代にむかって、1968年 がどのような時代であったのかを伝えるためには、前提として 1968年 の体温の高さを伝えなければ、1968年 はなにも伝わらないだろう。いまの体温の低い時代からみれば、1968年 の大学闘争に参加した学生たちは、「無茶の限りを尽くしていた」ようにみえるかもしれない。なぜ、あんな「無茶」をやったのか、「無茶」ができたのか、という問いに答えるためには、まず 1968年 が全世界的に発熱状態にあったことが理解されなくてはならない。ここでくすぶっている問題がすぐに火が点いて燃え上がり、

隣へ更に燃え移っていくといった、さながら乾燥しきった山林地帯での燎原の火の如くの広がり、を想像してみてもよい。

１９６８年 が発熱状態になれば、フランスのパリで、アメリカで、メキシコで、東欧で、中国で、そして日本で、あれほど若者たちが路上にあふれだして、一斉に叫び、訴え、示威行動するという事は起こりえなかった。パリで起こっていることはアメリカで起こっていることであり、中国で起こっていることは日本で起こっていることであった。低温のいまの時代に １９６８年 の発熱状態がうまく伝わるかどうかはわからないが、１９６８年 がどのような時代であったのかを伝えるためには、まず １９６８年 の発熱状態を伝えることから始めなくてはならないだろう。その発熱状態ということからすれば、年表からはみでるように列記されているさまざまな事象は、紛れもなく噴火現象にほかならない。あちこちで折り重なり、連続するようにして問題の噴出は絶え間がなかったといえる。

年表から浮かび上がってくるそれぞれの噴火現象はしかし、こういうことがあった、ああいうことがあった、というように目で追うことができて、一体どのような流れのなかで噴出してきているのか、ということや、なぜそのようなかたちをとって噴出しているのか、といった疑問に当然ながら、答えることはできない。あくまでも噴火現象が事実として記述されているだけである。であれば、それらの噴火現象をただ単に目で確認するだけで終わらせないためにも、時代の全体の流れにも踏み込まないわけにはいかない。時代の雰囲気はまた、時代の流れとも不可分な関係にあることはいうまでもない。

「二十世紀を一年ずつ、百年分のコラムで大総括」した『二十世紀』（橋本治著、毎日新聞社）には、もしかすると １９６８年 という時代の流れが書き留められているかもしれないので、気軽に覗いてみよう。 １９６８年 という時代を山頂付近で構成している「１９６６年」については、こう記述されている。

《この年の６月、日本にビートルズがやって来る。ビートルズは前年、「外貨獲得の功績」によって、女王から勲章を与えられている。ミニスカートの発明者マリー・クワントも、やがては同じ趣旨の勲章をもらう。世界に先駆けて産業革命を達成したイギリスも、今では「サブカルチャーを最大の貿易品目」とする国になっていた。ビートルズが勲章をもらった時、「イギリスの先進性」を言う人より、「イギリスの酔狂」を言う人のほうが多かった。工業力で躍進しつつある日本の大人達は、この変化に関心がなかった。

ビートルズの影響は世界に及び、若い男達は髪の毛を伸ばし始めた。「ビートルズの真似」と言うよりも、「それをすれば、オヤジ臭い髪型をしないですむ」という力の方が大きかっただろう。若い男に長髪がはやり、その必然として床屋は不景気になった——それを文化や社会や産業構造の変化と結びつける人は、まずなかったろう。若い男の長髪は、“不潔の象徴”として日本に定着する。

来日したビートルズにあやかるような形で、日本には「グループサウンズ」のバンドブームがやって来る。不潔な頭をした若い男にミニスカートの若い女が群がり騒ぐ——

「そこで許せるものは若い女のミニスカートだけだ」という体制派の男達は、各地の公共施設から、グループサウンズのコンサート締め出しを図った。ビートルズ来日公演の場所となった日本武道館は、二年前の東京オリンピックのために作られたもので、コンサートなどというのはこの時が初めてである。だから、「神聖なる武道の殿堂で何事！」という声もあった。いくら絶大な人気を集めても、グループサウンズの人気グループは、『紅白歌合戦』に出られなかった。そんな不潔な男達を出さなくても、日本には大勢の人気歌手がいた。「テレビに出ない大物ニューミュージック歌手」は、この締め出し以降定着する。発展する工業国日本で、「若者の文化」と既成の勢力は、まったく無縁に存在していた。

この1966年の初め、早稲田大学では全学ストという事態が起こった。建設された第二学生会館の運営をめぐる学生と大学側が対立していたところへ、「授業料値上げ」問題が加わった結果である。解決までに5カ月の時間を要したこの騒ぎは、翌年、翌々年に拡大して行く学生運動の時代の幕開けともなるものだが、当時の人は、「なんだかへんなことが早稲田で起きている」くらいの認識しか持たなかった。「へんなこと」は、その年の5月、中国でも起こる。文化大革命のスタートである。

文化大革命は、毛沢東が死亡する1976年まで続く。日本と中国が国交を回復するのは1972年だが、これは、「日本の頭越しにアメリカと中国が手を結んでしまったから、日本も慌てて中国に接近した」である——私はそう思っている。国交回復以前、日本人は人民中国に関心なんかなかった。中国のことを知っていれば「変わり者」である。そこでの文化大革命に対する日本人の感想は、「国交のないヴェールに包まれた国で、自分達とは関係のない、なんだか分からないことが起きている」にしかない。既に中国は社会主義革命を達成しているのである。そこでなんでまた「革命」が必要か？——多くの日本人にとって、それは「謎」でしかなかった。

文化大革命は、1959年に国家主席を辞任した毛沢東の逆襲である。しかしそう言われても、やっぱり日本人には分からない。毛沢東は、人民中国を出現させた偉大なるリーダーであり思想家である。「国家主席を辞任したって、その人の偉大さは変わらないだろう。その人がなんだったってまた、復讐や逆襲をしなければならないのか？」である。日本人の多くは、右も左も、社会主義・共産主義の思想的完成をなんとなく信じていたから、こんな風に考える。偉大なる思想的リーダーに「巻き返し」などが必要であるはずもない。だがしかし、毛沢東の作った中国は、まだまだ発展途上で、迷っていたのである。

1966年に権力奪取のための文化大革命を仕掛ける毛沢東は、1959年に国家主席を辞任していた。前年にスタートした「大躍進政策」と称される第二次五ヵ年計画の失敗に対して、責任を取らされたのである。

中国で第一次五ヵ年計画がスタートしたのは、1952年。その目的は、「近代化＝工業化」だった。この時期の世界に、国の「近代化＝工業化」の必要を否定する指導者なんかいなかっただろう。巨大なる農業国・中国も、やはり「近代化＝工業化」を目指した。

しかし自力では達成出来ないから、盟邦ソ連の指導援助を仰いだ。そこまではよかった。しかし、急速な工業化の結果、人口は都市へと大量に流入し、農村は疲弊した。中国の第一次五ヵ年計画は、表向き「失敗」とは言われなかった。しかし、「農村がこのままでもいいのか」という声は、1954年に国家主席となっていた毛沢東をうっすらと取り巻いた。しかも、中国の五ヵ年計画が失敗だか成功だかよくわからないでいるのに反して、先生役のソ連の五ヵ年計画は、成功を収めた。ソ連に対する毛沢東のライヴァル意識が持ち上がる。それで1958年、国家主席・毛沢東は、自身のメンツにかけて、農業と工業を同時に発達させる第二次五ヵ年計画をスタートさせるのだが、これが命取りになった。

人口流出で疲弊した農村に、過酷なノルマが要求される。農民は疲れ、そこに天候不順が加わって、二千万人の餓死者が出た。1959年に毛沢東が失脚した理由はこれである。

偉大なる指導者・毛沢東は、「工業と近代化」が苦手な人だった。失脚した毛沢東の後に登場するのは、そっち方面に理解のある鄧小平で、1959年以後の中国は、毛沢東にとって理解出来ない方向へ進む。窓際族となった毛沢東は、これが気に入らない。「その方向は間違っている、修正主義である」として、まだ子供と言ってもいい十代前半の若者達を紅衛兵に仕立て、ラジカリズムの攻撃を仕掛けた——それが、1966年からの文化大革命である。党総書記となっていた鄧小平、国家主席の劉少奇は、`自己批判`を要求され失脚する。中国は、毛沢東を思想上の`皇帝`とするラジカルな原始時代へ逆戻りするのである。

それから十年——毛沢東が死に、妻の江青とそれに従う`四人組`が逮捕され、文化大革命は終わる。改めて、鄧小平の開放路線が始められることになる。

文化大革命の十年は、世界の現実を理解しない中国の混乱である——と同時に、近代化＝工業化を達成した世界の方にとって、ちゃんと問題はあった。だから、若者達は騒がしくなる。「世界は間違った方向に進んでいる。だからこそ、これに対する若者の造反には意味がある」とする毛沢東の言葉「造反有理」は、当時の時代状況に関する最も深い認識であろう。しかし問題は、それを言う毛沢東が、やっぱりどこかでズレていたことなのだ。》

1966年という時代は、

1月、早大学費闘争で6月23日まで、155日ストが行われる。

6月30日、ビートルズが来日し、日本武道館で公演する。

8月18日、北京天安門広場で「文化大革命勝利祝賀」の紅衛兵らの100万人集会が開かれる。

以上の三つの出来事に尽きる、と橋本治が要約する。これらに共通するのは、子供から大人になりかけの、社会に出る前の若者たちが主役として登場している点である。早大ストは、戦後生まれの若者たちがマンモス大学で長期的なストを打った初めての出来事であったし、ビートルズ来日は初日には1万3千人のファンが詰めかけ、6520人もの少年少女が補導される初めての社会現象であった。橋本治が大半の行数を割いてい

る中国の文化大革命の担い手はいうまでもなく、毛沢東によって大量動員された十代前半の子供たちであった。要するに、１９６６年とはそれまで社会の舞台裏で引っ込んでいた子供や若者たちが堰を切ったように、社会の表舞台に大っぴらに登場するようになった時代である。

戦後生まれの若者たちが大人にむかって、社会にむかって初めて「物申す」ことができるようになった時代の先駆けとして、１９６６年は特筆されるべきかもしれない。だが、早稲田の全学ストは他大学でのストが皆無な状況の中での孤立した先駆的なストであったし、ビートルズ旋風にしても、日本の若者の大半は地方の遠くから眺めている観があった。消費市場のターゲットとして迫り出しつつある若者の他分野への、とりわけ社会の表舞台への突出を一気に後押ししたのは、中国の文化大革命であった。何しろ、これまで社会から押さえつけられるばかりであった、アモルファス（無定形）なエネルギーの塊をかかえ込んで蹲っている若者たちの社会の表舞台への登場を一気に促迫せしめたのが、中国革命を実現させた最高実力者の毛沢東であったのだから、誰にも文句のつけようがなかった。

少なくとも中国の文化大革命は中国の若者に、彼らが歴史の表舞台に登場して「物申す」に留まらず、思うがままに振舞うことにお墨付きを与えたのである。歴史の表舞台から引退させられようとする一人の老人と、歴史の舞台裏に押し込められている若者たちとの結託が文化大革命の名で成立したのだ。この老人は現存する権力者の誰よりも力を持っていたから、若者たちは彼の後ろ盾を得て、彼が望むであろうように彼の手足となって、思う存分間違った方向に進みつつある中国のなにもかもを破壊することに、血道を上げていったのである。たとえ毛沢東が「やっぱりどこかでズレていた」としても、そのことが明らかになるのは数年後のことであり、そしてそのこと以上に注目しなければならないのは、中国全土のあちこちからイナゴの大群のように湧き出てくる若者たちのうねりであり、彼らが紅旗を掲げて北京を目指して集まってくる凄まじい熱気であった。

中国全土を震撼せしめている怒涛のようなうねりと熱気が、民族を越え、国境を越え、海を越えて世界中の若者に伝播しない筈がなかった。ズレている毛沢東の「造反有理」の言葉であろうとも、「世界は間違った方向に進んでいる。だからこそ、これに対する若者の造反には意味がある」という認識が、世界中の若者たちに共有されている現実的な背景を考えるなら、中国の若者たちの「造反有理」が毛沢東という強力な後ろ盾を持っていると否とにかかわらず、敢えて権威に逆らううねりと熱気を風に乗せて世界中に運ばれていくのは、あまりにも自然であった。少なくとも早稲田の全学長期ストやビートルズ騒動というかたちでくすぶっている日本の若者の渴望しきった状況は、海を越えた大陸のてんやわんやの大騒動が発火となりうる素地を用意していたのである。そのようにみていくなら、１９６７年は、１９６６年に着火したかにみえる火種が、いよいよ本格的に燃え始める時代であったと捉えることができる。橋本治の「１９６７年」は、次のように書き留められている。

《1966年も終わろうとする12月15日、一人のアメリカ人が死んだ。世界中の子供に夢を与え続けたウォルト・ディズニーである。ディズニーの提供する夢で育って来た子供達は、もう子供ではなくなっていた。ディズニー・ランドは既にあったが、ディズニーのアニメには往時のような生色がなくなっていた。やがて世界が豊かになり、豊かな社会で育った子供達が「大人になる必要」をさして感じなくなった時、ディズニーの力は復活する。しかし、まだ時代はそこまで豊かではなかった。子供であることを終えた若者達は各自の混乱を実演し始め、それに連動するように、世界も不思議な平和と混沌を実演する。ウォルト・ディズニーに象徴される「美しい建前」がなくなるのが、1967年である。

ウォルト・ディズニーがいなくなった1967年、アメリカには「アメリカン・ニューシネマ」と呼ばれる映画が登場する。一つは、ウォーレン・ビーティとフェイ・ダナウェイの主演したアーサー・ペン監督の『俺たちに明日はない』。もう一つは、ダスティン・ホフマンの出世作となったマイク・ニコルズ監督の『卒業』である。フランスのヌーベル・ヴァークは1950年代の終わりに登場していたが、ハリウッドの映画は、フランスよりずっと厳しい検閲下にあった。不健康や不道徳はだめである。やたらとカットされる。そうしてハリウッドは、「美しい建前」を保って来た。しかしその時代は終わった。『俺たちに明日はない』は、男女の銀行強盗の話である。しかも、男の方は性的な不能者だった。『卒業』は、他人の結婚式をぶち壊しにして、女を連れて逃げてしまう男の話である。「カッコよくなければならない、美しくなければならない」という建前の時代は終わった。

1月には、ケープ・ケネディ基地のアポロ宇宙船に火災が発生して、宇宙飛行士が三人死んだ。2月になると、進行中のベトナム戦争で「枯れ葉剤」が使われ始める。アメリカ軍は、森林地帯に隠れ住むとされるヴェトコンを追い出すため、そこにダイオキシンをまいた。4月15日には、ベトナム戦争に反対する30万人が、ニューヨークで平和行進をした。ボサボサの髪をしたヒッピー達が登場してくる、「サマー・オブ・ラブ」の始まりである。

汚い髪にヘンな格好、音楽はロックで、ドラッグとフリー・セックスは当たり前。ニューヨークで平和行進が行われた当日の日本は4月16日——東京都知事に選ばれた美濃部亮吉の「革新都政」がスタートする日である。三年前に東京オリンピックを成功させた保守系の知事・東竜太郎は消えた。その4月は、ギリシアに軍事クーデターが起こり、独裁政権が成立する時でもある。

6月になると、イスラエルがエジプトに圧勝する第三次中東戦争の勃発である。これは6日間で終わるが、同じ月、日本の東京教育大学の評議会は、茨城県に建設中の筑波研究学園都市への移転を強行決定した。やがては学園闘争の火種ともなる、大学側の決定である。翌年になって燃え盛る大学闘争の火種は、複数の大学に存在してくすぶり始めていた。もちろん、既に日本製のテレビアニメが存在している日本の子供達にとって、

ウォルト・ディズニーが生きていようが死んでいようが、関係のないことではある。

7月になると、欧州共同体ECが結成される。アメリカとヨーロッパの蜜月は、もう終わっている。第二次世界大戦の戦場となったヨーロッパで、戦いに勝った国も負けた国も、「もうヨーロッパの時代ではない」という実感をしていたから、一つになろうとした——「イギリスは入れない」とかいう喧嘩もあったが。

同じ7月、暑い夏のアメリカのデトロイトでは、史上最大の黒人暴動が起こった。アメリカの大統領リンカーンが奴隷解放を宣言したのは、南北戦争中の1863年。黒人奴隷を使っていた南部が負けた南北戦争の終了が、1865年。そしてしかし、アメリカにはその後百年間、「人種差別」を否定する規定がなかった。1963年、シドニー・ポワチエが黒人男優として初のアカデミー主演男優賞を取った。当時高校生だった私は、「なんでそんなことが今更話題になるのだろう？」と不思議だったが、人種差別や職業上の性差別を否定する公民法がアメリカで成立するのは、ケネディ没後の1964年だった。

百年間も差別が放置されていて、急に「それはないことにしろ」と言われても無理だろう。文化大革命の中国なら、「古い悪習は捨てる、自己批判しろ」と責め立てて、社会常識を急変させてしまう手もあるが、アメリカに文化大革命はない。百年でアメリカ社会に当たり前のように定着してしまっている人種差別や偏見を、どうしたら変えられるのか。穏健派と急進派が対立してしまうのも仕方がない。急進派のマルコムXが黒人によって射殺されたのは、1965年のこと、穏健派のキング牧師が白人によって射殺されるのは、1968年である。そういう不安定な状況の中では、「史上最大の暴動」が起こっても仕方がないだろう。

人種の差別はある——1945年まで、白人社会は、平気で有色人種の国を植民地にしていた。しかし、1955年には、その旧植民地の国々がインドネシアのバンドンに集まって、第一回アジア・アフリカ会議を開いた。1967年の8月には、東南アジア諸国連合（ASEAN）の結成である。しかし、工業国化して豊かになるのが、本当にいいことなのか。

9月の日本では、四日市の^{ぜんそく}喘息患者が、石油コンビナートの会社を相手取って、日本初の「大気汚染に関する公害訴訟」を起こす。この年の4月には、富山県の^{じんづう}神通川流域で発生していたイタイイタイ病の原因が「三井金属神岡鉱業所の排水」と、大学教授によって断定される。それと同じ見解を国が発表するのは、一年後である。「新潟水俣病の原因は昭和電工の工場排水にある」ということは、この前年に大学教授が断言したが、民間の一年遅れで国がそれを認めたのも、やはりこの年の4月だった。

1960年の日米安全保障条約改訂以後、左翼陣営はひそかに分裂を始める。「三派系全学連」というものが登場し、「左翼の時代」は「新左翼の時代」へ移行を始める。1967年の10月8日、ベトナム戦争中の南ベトナムに、総理大臣・佐藤栄作が「訪問」しようとする。これを阻止しようとして、三派系全学連による「羽田闘争」が

起こる。`角材`で武装した学生達たちが警察の機動隊と戦う。`角材`で勝てるのか？
しかし、時代の若者達は「まず行動する」という方向へ進み始めていた。

その十日後、羽田にはミニスカートの妖精——モデルのツィッギーがイギリスからやって来た。その二日後には、日本の戦後の枠組みを作った元総理大臣・吉田茂が死亡する。老人の作った「平和にして単純な建前」が消える年、それが1967年かもしれない。》

橋本治は、66年の暮れの12月15日にウォルト・ディズニーが死去した事実から、「1967年」が始まっているかのような記述をしている。まるで《ディズニーの提供する夢で育って来た子供達》が、ディズニーのアニメのなかでは生きられない現実にし掛かれたとき、ディズニーのアニメのなかから「明日」がみえてこない現実の混沌にむけて、若者たちが弾ける如く飛び出さざるをえなかった、とでもいうかのように。ディズニーのアニメに取って代わる67年の「アメリカン・ニューシネマ」の代表作品である『俺たちに明日はない』は、性的な不能者である男と女の道行きが銀行強盗の果ての銃弾によるハチの巣だらけの凄惨な最後を描いて見せた。どんなに無惨で意味のない最後を迎えようとも、銀行強盗を行っているときだけは二人とも最高に生命が輝いている瞬間を味わい尽していたのだ。「俺たちに明日はない」というタイトルは、いまの若者たちは明日と切断された今日を生きるしかない、という謂であった。

もう一つの代表作品『卒業』もまた、別の「俺たちに明日はない」であった。「明日」のことなど考えずに、結婚式から花嫁を連れ出すことだけが男にとっての切羽詰った事情であった。その後、どうなるのか、なんていうことはどうでもよかったし、考えないところで行動に踏み出していたのである。タイトルの「卒業」は、自分があるいまの場所と訣別して、そこから飛び跳ねるという意味であり、依然として「明日」はみえてこなかったから、「どこへ」という問いにみつめられたままであった。その点が、毛沢東の号令によって文化大革命を担った中国の若者たちと決定的に異なっていたのである。紅衛兵たちには毛沢東によって約束されている「明日」があり、その「明日」を信じて中国のいまを破壊していったのだ。もっとも、毛沢東によって約束された「明日」は毛沢東の死と共に切断されてしまったが、そのことが中国の若者たちにもたらした衝撃の大きさは類をみないものであったにちがいない。

1966年から67年に跨って隆起してくる若者たちのうねりと熱気は、中国の文化大革命以外の世界では「俺たちに明日はない」という心情と現実と深く覆われていた。若者たちのあらゆる場所を占拠しようとする熱気とうねりは、アメリカのデトロイトでは史上最大の黒人暴動を引き出していた。日本では6月2日から5日までの釜ヶ崎暴動や、8月17日から19日までの山谷暴動に感染していった。「明日」がない若者たちの熱気漂う不穏なうねりは、「人種差別」や「貧民差別」によって「明日」に蓋をされている黒人やホームレスにまで及んだのだ。この年に「大気汚染に関する公害訴訟」が起こったり、企業の工場排水による「公害」病が頻発するのも、「明日」がない世界を

大きく浮かび上がらせていたのである。「公害」病を被っている人々は、生活の次元においても「明日」がない暮らしにまで追い込む日本の経済繁栄というものの質を告発していたのだ。

学生たちの街頭反戦闘争は「明日」がない状況を突破する試みであるかのように、剥がした路上の敷石の破片を遠くに投げ、`角材`を振り回す「新しい」行動を突き出していたが、`角材`による武装という発想は、`角材`では武装しきれない領域からの不安と当惑を膨大に引き寄せていた。`角材`で警察の機動隊とどこまで戦え、突破できるかという当面の課題は、`角材`に込められた幻想量の追求というもう一つの課題を放置しつつあったのだ。《しかし、時代の若者達は「まず行動する」という方向へ進み始めていた。》つまり、「まず行動する」ことによって切り拓かれるにちがいない「明日」に賭けてみようとしたのである。まず、`角材`から始めよ、であった。その勢いに加速されて、「１９６８年」に踏み込まれていった。

《１９６８年がどんな年だったかを、一言で言うのは難しい。そして、１９６８年とは、その説明の`ややこしさ`がとても重大な意味を持つ年なのである。

この年の持つ`ややこしさ`は、決して説明不能ではない。しかしこの年の`問題`は、それを説明するための膨大な言葉を必要とする。おまけに、その千万言の言葉が、事態を明快にしてはくれない。かえって逆に、その説明の膨大さによって、説明される側の頭の中が混乱する。「説明のための言葉が事態をかえってややこしくする」——１９６８年とは、そんな年なのである。

たとえば、日本の１９６８年とは、各地に「大学闘争」あるいは「大学紛争」が激化して行く年である。この年には、そういう`特徴的なもの`がある。ところが、その`特徴的なもの`がどんなものかを説明しようとするとなると困る。「１９６８年の大学闘争とはなんだったのか？」と言えば、その横から、「あれは`闘争`ではない。ただの`紛争`だ」という異議も出る。それを「大学闘争」と言うのか、あるいはまた「大学紛争」と言うのか——同じ事態が二つの違う言葉を持つから、その説明が困難になる。事態の説明以前に、事態を規定する言葉の詮索が起こって、肝心の`説明`はどこかへ行ってしまう。１９６８年の厄介とは、これである。

１９６８年の日本に、なぜ大学闘争が多発したか？ 理由は二つある。一つは、この年が日米安全保障条約が十年ぶりに改訂される１９７０年（いわゆる「７０年安保」）を間近にしていた年だったことである。既に前年の１９６７年には、「羽田闘争」と呼ばれる`事件`も起こり、いくつかの大学では「授業料値上げ反対」を叫ぶ学生達がストライキを実施して、大学当局を困らせていた。学生達がなぜそれをするのかと言えば、当然そこには「７０年安保の闘争へ向けて」という伏線がある。しかし、１９６８年の大学闘争の多発は、実のところ、「７０年安保の接近」とはあまり関係がない。そうであってもしかるべきところに、「様々な問題」が日本の大学には起こった——これが、１９６８年の日本に大学闘争が多発した最大の理由である。

1968年の1月、既に東京大学の医学部はストに突入していた。理由は、それまでの「インターン制度」を「登録医制度」に変えるという、言ってしまうと「医学部内部の問題」である。それが3月になって、突如全学的な広がりを見せる。そうなった理由は、医学部の問題で学生の何人かが教授に暴力をふるったとして処分され、その処分に事実誤認があったということである。

当日現場に居合わせるはずのない学生が、処分の対象になっていた。学生達は、大学側に事実誤認を認めて不当な処分を撤回することを要求した。しかし、大学当局はこれを認めない。「東大という大学の権威をカサにきて、大学当局は自分の過ちを認めない」——これが東大闘争を拡大させ、翌年の「安田講堂の攻防戦」にまで至った唯一の理由である。とんでもなく難解な言葉と理論が飛び交った東大闘争の根本にあったものは、いたって分かりやすく具体的なものである。

1968年の5月には、日本大学でデモが起こる。日大は、当時の日本で最高の学生数を誇るマンモス大学であり、高度成長の時代に突入し始めていた日本株式会社を支えるサラリーマン要員の大量生産を目指すマスプロ大学だった。それゆえにこそ日大は、「レベルの低い大学」と思われ、学生達は傷ついていた。しかもここでは、大学当局が体育会学生を私兵のように使って、学生運動を暴力で弾圧していた。そういう前時代的な大学当局と、それに唯々諾々^{いいだくだく}と従う学生達によって出来上がっている日大は、「思想性皆無」であり、「学生運動が起こるはずのない大学」と思われていた。そこに「学生デモ」は登場する。理由は、「大学に20億円の使途不明金があった」ということである。

大学と学生を牛耳り、私腹を肥やしていたワンマン理事長の横暴に対して、学生達は立ち上がる。東大闘争と並んで1968年を代表する日大闘争は、「安保」というものとはまったく関係がない、ただの「大学当局の不正を正す学園の民主化要求」なのである。

両方の闘争に共通するものは、大学当局の「欺瞞」である。それ以上の理屈はない。だからこそこの闘争は、多くの学生達の支持を集める。この闘争に参加した学生達にとって、すべては明確で分かりやすいのだ。しかし、これを「外部の目」で見ると、「事態」はいささか違ったものになる。

「東大のエライ先生が、そんないい加減な処分をするのだろうか？」と、ある人間は思う。別のある人間は、「上の人間が悪いことをするのなんか当たり前で、いくら文句を言っても、世の中は変わりゃしないさ」と言う。「そのどうにもならない世の中の仕組み」にたてをついて、お前達は どうやって生きて行くんだ？」などという声もある。簡単なのは、文句を言う学生に「暴力学生」のレッテルを貼ることである。「暴力学生」のやることなのだから、それは「闘争」ではなく「紛争」である。そういう「外部」に規定されて、学生達は、「欺瞞は大学当局だけではない」という、それ以前から薄々感じ取っていたことを、さらに明確に知る。「闘争」は拡大し、事態は混迷し、「紛争か、闘争か」という言葉の議論も激化する。「紛争か、闘争か」という議論は、「問題」を

発生させる土壌の矛盾をそのままにあらわす、いたって本質的な議論だからである。

日大闘争の起こった5月に、フランスのパリ大学ナンテール分校でも、学生達が立ち上がる。理由は、「男女別宿舎の相互訪問の自由」である。学生達はそれを求め、大学当局はそれを拒む。当局側の対応の悪さが事態を悪化させ、やがては「五月革命」と呼ばれるものになる。五月革命のパリにあったものは、日本の大学にあったものと同じものである。

南北ヴェトナムの対立に介入したアメリカは、連日「北爆」を続けている。人民中国では、それまでの革命の中途半端さを追求する文化大革命が進行中で、「造反有理」を叫ぶ若い紅衛兵達が暴れる。「すべての反抗には必然性がある」という毛沢東の言葉は、この時代の根本となるものであるが、しかし、だからと言ってそれだけでどうなるものでもない。8月になると、「社会主義からの自由」を求めるチェコに、宗主国ソ連の戦車が侵入して武力弾圧をする。ヴェトナムやチェコの間人にとって、それは「闘争」であろう。しかし、アメリカやソ連の当局者にとって、それはただの「紛争」なのである。

事態打開の手前で「紛争か、闘争か」の議論は起こり、この議論の存在が事態の打開を妨げる。1968年は、そういう「論争の年」で、多くの人がその後の世界に感じる「記述困難」は、この年のつまずきに由来するのである。》

この年に各地に激化した大学闘争に対して、《その横から、「あれば`闘争`ではない。ただの`紛争`だ」という異議も出》され、「闘争」が拡大し、事態が混迷するにつれて、《「紛争か、闘争か」という言葉の議論も激化する》と、橋本治は「1968年」について説明するのに、その`ややこしさ`が特徴的な年であると迂回するように述べる。しかしながら、《1968年の日本に、なぜ大学闘争が多発したか?》というように、彼自身一貫して「大学紛争」ではなく「大学闘争」と言い切る。1967年に起きた「羽田闘争」も羽田紛争とはけっして言わない。もちろん、単なる言葉の問題ではない。大学闘争とみるか大学紛争とみるかによって、その人の立ち位置が一挙に照らしだされてしまう問題なのだ。ちょうど1945年の日本について、敗戦の年とみるか終戦の年とみるかによって、問題が全く異なってくるのと同じことなのである。

橋本治が東大闘争といっても、けっして東大紛争といわないのは、東大生であった彼は東大闘争と呼ぶ以外にない事態に関わってきたからだ。東大紛争と呼ばれる事態にかかわってきたわけではけっしてなかった。「闘争」とは文字どおり「たたかい争う」ことであり、「紛争」とは「もめごと」や「ごたごた」以上の事態ではありえない。闘争には紛れもなく`主体なるもの`が刻印されずにはおかないが、「もめごと」や「ごたごた」にすぎない紛争には、せいぜい当事者が迫り上がってくるだけのことだ。東大闘争や日大闘争によって白日の下に晒されたのは、《大学当局の`欺瞞`》であり、学生たちはその`欺瞞`の構造を撃つために立ち上がり、闘いを挑んだのであって、大学内部のもめごとやごたごたに関心をもって首を突っ込んだわけではなかった。

《南北ヴェトナムの対立に介入したアメリカは、連日「北爆」を続け、他方《8月に

なると、「社会主義からの自由」を求めるチェコに、宗主国ソ連の戦車が侵入して武力弾圧をする。ヴェトナムやチェコの人間にとって、それは「闘争」であろう。しかし、アメリカやソ連の当局者にとって、それはただの「紛争」なのである。》橋本治のこの説明によって、ヴェトナムやチェコの人間の側に立って事態を捉えるのか、それともアメリカやソ連の当局者側に立って事態をみるのか、という決定的な線引きが「紛争か、闘争か」の議論に内在していることが明らかにされている。アメリカが連日「北爆」を続けるのは、北ヴェトナム共産軍によって南ヴェトナムが共産主義国家にされてしまうという、それまでの東南アジアにおける現行秩序が変更されるのを阻止するためであり、ソ連のチェコ侵攻も東欧の社会主義圏の現行秩序を維持するためであった。

冷戦の対立関係のなかでアメリカにとってもソ連にとっても、自分たちの勢力が削られないように世界の現行秩序を維持することが最優先課題であった。そんな彼らからみればヴェトナムやチェコの人々が起ち上がってやらかしていることは、ただ単に現行秩序を混乱させるもめごとやごたごたを起こしているだけのことにしかすぎなかった。もちろん、彼らは冷戦という国際秩序体制のなかで抑圧され、苦しんでいる人々の姿はみなかったし、見えなかったのである。同様に、「大学闘争」ではなく「大学紛争」とみる人たちは、学生たちが起ち上がったことの意味や、彼らが闘争主体としてどのような存在的な課題の前に自らを立ち会わせることになるのか、といった問題をみずに、単に現行秩序を混乱させる「暴力学生」としかみなかったのだ。かくしてあらゆる闘争が「暴徒」としかみない現行秩序維持勢力に対する異議申し立てや反乱として立ち現れてくると全く同じようにして、「大学闘争」も1968年の時代を覆い尽くしつつあった。もちろん、それは闘争の端緒にすぎなかった。

2005年3月17日記